

小児白血病学童の復学時の学校生活への影響

(分担研究：小児期白血病患者の生存の質改善に関する研究)

細谷亮太、真部 淳、西村昂三 (聖路加国際病院)

及川郁子、征矢野あや子 (聖路加看護大学)

要約：小児白血病学童が復学する際、児は外観の変化に伴う不安を抱いている。学級内では教師の力により級友と良好な関係を築いているが、低学年児は上級生にからかわれている。身体的には帰校後の調整により健常児とほぼ同様の生活を送っている。学業の遅れは児の意志による自己学習で補われている。学校とは小まめに連絡を取り合っているが、意志疎通が不十分な症例もある。今後調査を進めながら学校、家族双方への支援が望まれる。

見出し語：小児白血病、長期欠席、学校生活、復学、生存の質

はじめに

小児白血病の寛解率の向上とともに、社会の一員として成長・発達を続ける小児が増えてきた。学童の場合、学校が彼らの成長・発達に重要な役割を果たすことを考えると、看護者の適切な支援により順調に学校生活に復帰することは、その後の患児の成長にとって必要なことと思われる。慢性疾患により長期入院、欠席していた小児が再び学校生活に戻るとき、勉強の遅れ、仲間と上手に溶け込めない、先生がどう対応してよいか解らない、という問題が報告されている。しかし白血病児については治療の向上に重点が置かれ、生存の質については十分な検討がなされていなかった。今後

白血病児の延命と共に学校生活における様々な問題が顕在化してくることが考えられ、そのための援助方法を探る一助として調査を実施した。

調査目的

小児白血病児童が復学する際に生じる患児、家族、担任教師のそれぞれが抱く問題を明らかにする。

調査方法

対象：聖路加病院に通院する寛解期にある小児白血病児童で、1回以上復学した経験をもつ小児とその親、担任教師または養護教諭

内容：最初の復学当時に思い出ししてもらい、復学前後の気持ち、復学後の身体状況、授業参加状

況、級友の反応、教師・学校との連携などについてそれぞれ小児、親、教師に質問紙を用いて面接調査をした。

結果と考察

6例の児と親、2例の担任教師、1例の養護教諭より結果を得ることが出来た。(表：調査結果-1、2を参照)

1. 全例ALLで、発病から3～6年経っている。一度入院すると20～100日と長期間に及んでおり、その間外泊してもほとんど学校は欠席している状況であった。

2. 復学前後の気持ちとしては、学校に行ける、友達に会えるという喜びと同時に、外観の変化(脱毛が復学时総ての症例に見られた)を友達がどう受け止めるだろうか、長い間欠席したが友達はどんな態度を取るだろうか、という不安を抱いていた。この外観の問題については白血病以外の慢性疾患で長期間入院した児童には余りみられないことである。

3. 学級内の交友関係は、入院中からの教師の指導・配慮により患児と級友のつながりは保たれ、復学後も患児をいたわるなど良好な関係であった。しかし学級外では上級生の男児から外観などのことからかわれたりしており、低学年児ほどその影響は大きかった。

4. 復学後の身体状況では、どのくらいの自宅療養期間ののちに学校に行き始めたかは明らかではないが、全例が復学直後から健常児とほぼ同様の学校生活に戻っており、帰校後家で静かに過ごす、休息を取るなどの調整を図っていた。しかし体育などではつらいときも教師に言えず無理をしたり、逆に教師に不安があって運動を制限したために児が寂しい思いをするということもあり、患

児の状況にあわせた適切な指導・依頼の難しさを感じた。

5. 長期欠席による学業の遅れを3例の家族と1例の教師が指摘している一方で、補習等に積極的に取り組んだのは1例のみで、他は児の状態により自己学習を行っていた。

6. 発病以来、家族は治療や健康管理、疾病の予後に強い関心が向けられており、学校や勉強への認識については明確なことは分らなかった。

7. 学校と家族の連携は、総体的に家族から学校に小まめに連絡が行われており、症例4を除いては良好な関係が築かれている印象を受けた。しかし教師との面接が行えた症例1では、両者の意志疎通が十分ではないために見解の相違が見られた。また症例4では、家族が学校と連絡を取れる状態ではないため、学校が家庭と病院とのパイプ役(毎日の健康観察・服薬を促す・欠席をしたときの様子確認など)になっている。この例では養護教諭も関わっているが、実際には十分な活動はおこなわれてはいないようであった。

まとめ

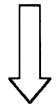
以上のデータからだけでは十分なことはいえないが、いくつかの問題点が出てきた。と同時に、家族と学校との連絡はそれなりにうまく行っているものの、それには患児の学校に行きたいという願望と家族(親)の理解と協力が大変重要であることがわかった。また教師側には患児を預かる事や、具体的な対応方法などについての不安が明らかになり、この病気についての啓蒙や教師のサポートが必要であることが示唆された。今後はこの点を踏まえ、より詳細なデータをもとに問題点の改善を図っていきたい。

表：調査結果-1

症例	入院発病年齢	欠席期間	復学前後の気持ち	復学後の身体状況		学習	学習態度	学習への影響		
				増減	外見・体調					
《1》 7歳 (小2年) 女児 ALL	4歳	1. 4週間 2. 小2 2週間 (計6週間)	見:脱毛しているので行きたくない→結果にいじめられずにはいった。同学年や上級生の男児から外観やうがいなどについていじめられがらあわだ。靴いじめられて帰宅することあり。見ががえばつてくれたことを新っていた。	増減 脱毛(不決)	脱毛(不決) ムーンフェイス	帰宅後しばらく自宅で休むことがあった。復学などの時の交流がなくなった。	有り (詳細不明) 変化なし 勉強が分からずからかわれた	不明 勉強が遅れるのが気にして自 担任より国語と算数の補習を受けた。		
《2》 7歳 (小2年) 男児 ALL	6歳 (小1)	小1 2.7日 3.10日 4.7日	見:早く学校に行きたい。友達に会えるのが楽しみ→結果に喜ばれた。外観のこと言われつらかった。靴、体力、勉強がついていけるだろうか。外観に怒る友達を反省を見がどのように受けとめるか心配。気分転換に漢字すればよいと思う。	総て 通常ど うり	脱毛有り 倦怠感の強い時 2-3日休んだ 体調は良いが まだ完全ではない。	帰宅後すぐ寝るようになった。海に出て遊ぶことを続けているが、スイミングは止めた。	有り (漢字)	変化なし	不明 あまり勉強は好きではないが、虫が時々観察をみている。	
《3》 11歳 (小5年) 男児 ALL	9歳 (小4)	1.80日 2.80日 12.20日 3.90日 4.90日	見:友達とのような態度を取られるだろうか→行ってみたらみんな歓迎されはったとした。上級生に脱毛のことでからかわれた。靴、いじめられた。履き替えられるのではないかと半信半疑だった。帰宅後も友達と遊ぶようになりはった。	総て 通常ど うり	脱毛有り	帰宅後すぐ寝るようになった。海に出て遊ぶことがなくなった。ソロバンを習い始めた。	有り	遅れを取り戻すようにと一層努力するようになった。	普通 勉強が遅れるのを悔しいと思 い学校からのプリントや 辞書を利用して入院中より おこなっていた。	
《4》 12歳 (小6年) 男児 ALL	11歳 (小5)	1.小5 80日 2.小6 20日	見:脱毛を友達に見られたくない。母が先生に話していたので不安は少なかった。→友達が脱毛によまなく気を使わずうれしかった。みんなの注目も浴びてうれしかった。 履:体力・学力がついていけるだろうか。いやな思いをした様子もなく体力・学力がついていけたので安心した。	体育 部活の 朝服 脱毛日 のみ 普通	脱毛(無い) ムーンフェイス	おぼれないうちに気がついていた。(復学後2-3日のみ)	有り (漢字) 勉強が分かるようになった。友達が教えた。	変化 なし (下位 +下位)	解はせずともと と勉強は大嫌いで ない。	
《5》 15歳 (中3年) 女児 ALL	9歳 (小5)	1.小4 150日 2.小5 40日 3.中2 55日	見:おんぶりできなくなった。学校へ行きたくなくなった。脱毛されたらいいな。久し振りでなんとなく脱毛した。 履:体力・学力がついていけるだろうか。いやな思いをした様子もなく体力・学力がついていけたので安心した。	通常 ど うり	脱毛(足はあまり 気にしては なかった) 体調は良かった 電卓習字を自動 車にした。	家に友達を呼んで遊ぶようになった。海のおけいこは止めた。以前より早く寝るようになった。	無し	自分から進んで勉強するようになり、体調を心配しなくなった。	向上 (中位 +上位)	総額と入院中より 学校からのプリントを 行っていた。
《6》 14歳 (中3年) 男児 ALL	11歳 (小6)	1.15日 2.45日 3.90日 この間 連続して欠席	見:前に特別空気がなかった。みんなに囲まれているのが気がかりで、学校のことに気はあまり寄せられなかった。	通常 ど うり	脱毛 2-3回 発熱で早退した。 体調は良い	静かにしているよう に観察が増えた。	無し	変わらな	変化 なし (上位 +上位)	身体のことか第一で勉強のことは考えられなかつた。入院中も体調悪くそれどころではなかった。

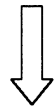
表：調査結果-2

症例	学校との連携		配慮し(た)点	面接内容
	発病後初めての連絡	復学後の連絡		
《1》	小学校入学時 母親から校長・担任 養護教諭 病名(LK)・感染症の注意、脱毛・薬により情緒不安定になりやすいこと等	直接面接 治療中の様子 具体的な生活上の注意事項 連絡帳の利用	体育の見学 脱毛について クラスへの指導	《1》の例 自宅療養中に家庭訪問をしており、兄の学校生活上不安はない。 実際は、兄を他児と同じように扱ってほしい。運動もしており、兄がとを担任に言えず無理をしないことがあり、母親はもっと気を配ってほしいと思っている。
《2》	入院時 母親から校長・担任 診断書提出	直接面接 児の状態	普通に扱ってほしいこと 脱毛について クラスへの指導 感染症の連絡	
《3》	入院時 母親から担任 血液の病気と説明	連絡帳 入院中の様子	普通に扱ってほしいこと 脱毛について	
《4》	入院中 医師から校長・教頭・担任 病名(LK)	復学時 医師から校長・担任・養護教諭 病気について、バイア役の依頼	毎日の健康状態の観察 欠席した時の様子の確認 服薬を促す 脱毛について	《4》の例 胃疾患・ぜん息児童を扱った経験有り。LKについてよくわからず、細かいことまで不安になる。具体的に何に気を付ければよいのかわからない。 兄・家族のバイア役を依頼されているが、うまく果たせていない。 養護教諭と担任の連絡も不十分。
《5》	診断確定時 両親から校長・担任・主事 病名(LK)、治療、兄の様子	直接面接 連絡帳の利用(休調の悪そうな日)	脱毛について クラスに説明	
《6》	兄・親とも落ち着いてから 母親から担任・養護教諭 病名(LK)、治療のみとし、気を付けてほしいこと	直接面接 治療中の様子 お互いの情報交換	怪我をさせない、怪我をした時の注意	



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:小児白血病学童が復学する際、児は外観の変化に伴う不安を抱いている。学級内では教師の力により級友と良好な関係を築いているが、低学年児は上級生にからかわれている。身体的には帰校後の調整により健常児とほぼ同様の生活を送っている。学業の遅れは児の意志による自己学習で補われている。学校とは小まめに連絡を取り合っているが、意志疎通が不十分な症例もある。今後調査を進めながら学校、家族双方への支援が望まれる。